
メモリア

逃げ水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリア

【Nコード】

N 8 6 3 4 D

【作者名】

逃げ水

【あらすじ】

女の子に対し臆病な僕。そんなある日突然の出会いが。

（前書き）

ぜひ、最後まで付き合ってください。

とある病院の一室。

そこで尊い人の命が消えようとしていた。

「心音が停止しました。18時16分です。」

担当医が死を告げる。

病室に静寂がはしる。

それを破るかのように死んだ子の母親が口を開く。

「この子は……私たちを恨んでいるでしょうか……。」

「……いえ……。」

医師は応える。

「きっと……感謝されていると思いますよ。」

ファーストキスは6歳の時、それが人生の絶頂期だった。

それ以来ぼくは、キスどころか女の子と手をつないだことさえない。

「ふっふっふっ。けど、それも昨日までのことさ。」

予備校にも行かず遊びにも行かず。

死ぬほどバイトして手に入れた……15万円の等身大フィギュア！！

「やった〜どうしよう！！すっごいリアル！！」

言っておくが、ぼくはオタクでもないしオタク体型でもない、内気なだけだ。

……そりゃ本物の女の子がいいけど、店には売ってないから仕方ないよなあ……。

するといきなり停電になった。

「わっ、な・なんだ？停電！？」

いきなりの停電にパニクるぼく。
しかし、すぐに電気は点いた。

「あ、ついた。なんなんだ一体？」

「あいたたた。」

おかしい。

ぼく以外の誰かの声がした。

ぼくは、声のする方えと顔をむけた。
すると・・・

「どこ、ここ？天国？」

不思議な事にぼくが買った等身大フィギュアが動いて喋っていた。
そんな機能付いていないのに。

「うわあああああ。なんなんだよお前！？なに動いてんだ！？」

「・・・・・・・・・・。」

焦るぼくを無視するかの如く、フィギュアは自分の体のあっちこちらを見回し、手足を動かしていく。

「本当だ！！すごいよ！！私動いてるよ！！」

「な・・・なに？」

どうやらこのフィギュアも動く事に驚いている。いや、どちらかというと感激している。

「私、さっき死んだのに！！なんだかまた生き返ってるし！！」

死んだ！それじゃこいつ死んだ人間の魂が乗り移ったとでもいうのか。

でもそれ以外にこの状況を上手く説明することが出来ない。

「きつとあれだわ！！私の報われない思いをかなえるために神様がチャンスを与えてくれたんだわ！！」

今だにフィギュアはぼくに気付かない。

「あ、あの〜。」

真相を知るためにも声をかけてみた。

「……ありや？なんか……この体、おかしくない？なにこれ？」

ぼくはドキツとした。

そして、全ての真実を知るため全てを彼女に話した。

「等身大フィギュア？」

彼女の純粋な瞳がぼくを見詰める。

それにぼくは堪えられず目をそらす。

それでも彼女は見詰めてくる。

「ごめん。」

悪くないのに謝ってしまった。

「フィギュアってなに？」

ぼくは自分の耳を疑った。

「知らない？」

「うん。」

本当に知らないのか。

「大きな人形のこと？」

「そう！！その通り！！」

しめた、本当にこいつなにも知らないんだ。

「でも不思議・・・なんとなく私に似てるよ。」

そういえば、さっき聞きそこねた。

「あのさ・・・さっき死んだって言ってなかった？」

「うん。死んじゃった。でも気付いたらここにいたの。」

「んー・・・車にひかれた。」

「じゃあれかな？なにかこの世に思い残すことがあって成仏できないとか。」

「それだよ！！」

ビシッという効果音が聞こえそうなほどな勢いで指を指してくる。

「だったら心残りがなくなれば成仏できるんじゃないか？」

「そうだね。そうかも知れない。」

そういえば名前を聞いていなかった。

「ところで・・・君の名前は？」

「・・・由美！」

・・・由美か・・・。

そこであることに気がついた。

「あのさ服着る？恥ずかしいだろ？」

こいつ、裸のままだった。

「んーん。恥ずかしくないよ。」

「そ、そう？でも・・・俺が恥ずかしいから・・・」

羞恥心がないのかこいつは。

「ところで・・・さっき言ってたこの世に思い残したことってなんなの？」

ぼくは、ひとまず着る物を貸して聞いてみた。

「・・・炊事洗濯。」

「はぁ!？」

成仏出来ない料理がそれか。

「それが成仏できないほどのことなのか!？」

「うん。」

即答してきた。

「だって・・・それだけをずっと夢見てきたんだもん。」

「はぁ・・・よくわかんないけど・・・だったらぜひうちの炊事洗濯を頼むよ。」

「いいの!？」

さも想定外のように由美は驚いた。

「そりゃ・・・もちろん。」

ふと、ぼくは思った事を言ってみた。

「ははは、なんだか新婚さんみたいだな。」

「ぐっつ。」

由美はぼくの話しを無視して、いきなり眠り始めた。

「なんだ、こいつ・・・?マジ寝してやがる。」

それから、由美は起きる事なく夜をむかえばくも寝ることにした。

懐かしい夢を見た。

あれはぼくが6歳の時、好きな子に初めてのキスをした時のことだ。

「大きくなったらぼくのおよめさんになってよ!!」

小さいなりのぼくのプロポーズだった。

でもその女の子はなにも言わずに走りさっていった。

そうフラれたのだ。

無邪気だったのか馬鹿だったのか、今思えばマセたガキだった。

女の子に対して臆病になったのはその時からだ。

「ん・・・・・・・・」

なんだろう。

なにか物音がする。

「あ、おはよーっ!!」

起きると由美が掃除をしていた。

「ごめんね、起こしちゃったね。でも、お掃除楽しいねーこの部屋片付けが良かったよ。」

由美は楽しそうだった。

「あ．．ありがとう．．．。」

ひとまずお礼は言うておく。

「けど、女つ気のない部屋だねえ。彼女とかいないの？」

「ああ、彼女どころか女の子の手をにぎったこともないよ。」

「ふん．．．」

まるで興味がないみたいな返事をしてかた。

「あ、そうそう！！あとね、お料理がしたいの！！けど、冷蔵庫の中ジューズしか入ってないし。」

いきなり話題を変えてくる由美。

「じゃ、一緒に買い物へ行こうか。」

「やった〜いくいく〜！！」

そして、着替えたぼくたちは近所のスーパーに向かった。

「うは〜！！外だよ、太陽だよ、まぶしいよ！！」

「なんなんだお前！？挙動不審だぞ。」

おもつきし他人の視線が痛い。

「いや〜ん、楽し〜！！」

スーパーに行っても由美のテンションは変わらない。

「買い物楽しかったね。見たことないものがいっぱい売ってたよ〜。」

「は？なにが？ただのスーパーだぞ。」

前から思っていたが、由美は世間の事を知らな過ぎる。
ひよつとして……

「由美は。ひよつとして死んだのがすごい昔とか？」

「んーん昨日だよ。死にたて。」

……その割には落ち着いてるよな……

「そういえば由美は何歳なんだ？」

「18。」

「なんだ、もつと年下かと思ったよ。おれと変わらないじゃないか。」

本当にびっくりだ。

まさか歳が近いなんて。

「なあ。せつかく化けて出てきたんだから両親のところに顔出してくれば？喜ぶと思うよ。」

すると、由美の表情が一瞬曇った。

「んーん、喜ばないよ。きっと迷惑だと思う。」

「そうか？そんなことないと思うけど。」

すると今度は、少し悲しい表情で話しかけてきた。

「ね。ひとつだけお願いがあるの。」

お願い？

「うちのお母さんに伝言を伝えて欲しいんだけどな。」

「まあ・・・そんなことでいいなら・・・。」

家に帰るとさっそく料理に取り掛かった。
しかし、それは惨劇と化した。

「うわーっ！！お鍋が炎上してるよー！！」

「な、なにやってんだ！？それにこれは鍋じゃなくてフライパンだ！！」

「そんなの知らないよー！！」

すぐに台所からどかせ、代わりに調理する

「今までに料理したことは？」

「ないよ……。」

「それでよく料理をしたいなんて……。」

「だからこそお料理したかったんじゃないか。」

「そりゃそうかも知れないけど……。」

「あいたー。」

「今度はなんだ。」

「指が切れたよー!!」

「ああっもうっ!!」

この後もさまざまな事が起こったが、なんとか無事に料理は完成した。

「……なんとかできたね。」

「できたな。」

はつきり言って完成したのが奇跡に近い。

「さささ、私が持っていくから部屋で待ってて。」

「ああ。」

由美に言われたとおり部屋で待つことにした。

しばらくすると。

「おまたせ。」

由美が料理を持ってきてくれた。

「へっへっへ。」

楽しそうに料理を置く由美。

その雰囲気がなんだかたまらなく恥ずかしい。

「はい、召し上がれ。」

「ああ。悪いなおれだけ。」

正直食べるのが恐い。

「んーん。私、この体じゃご飯食べられないからねー。」

確かに人形じゃ食べられない。

「さささ。」

食べるよう催促する由美。

覚悟は決まった。

「じゃいただきます・・・。」

「いただきます。」

ぼくは恐る恐る箸を料理に運び、口にもっていく。

「うつー!!」

「どうしたの！？やっぱりおいしくなかった!？」

「おいしい、おいしいよ!!すごい!!」

キョトンとした顔に由美はなった。

「あの料理過程がうそみたいだ!!」

「・・・おかわりもありますよ?」

由美は相当嬉しかったのだろう。

目から涙がこぼれていた。

それでもぼくはこんな生活が嫌いではなかった。いや、ずっと続いて欲しいと思った。

だからぼくは由美に尋ねてみた。

「な、なあ。」

「ん?何?」

「あの・・・もし良かったらなんだけど・・・ここで一緒に・・・。」

「・・・・・・・・ごめん。」

由美は俯いたまま応えた。

「やっぱりいやだよな・・・。」

話している時、由美はいきなり床に倒れた。

「お・・・おい!？」

すぐにそばに駆け寄り抱き起こした。

「どうしたんだよ!？しつかりしろ!！」

「ははは、ごめんね。また眠くなっちゃったよ。」

まさか・・・。

「なんだかね、自分の願いがかないそうになると眠くなるんだよ・・・
すごく眠い・・・魂抜けちゃいそう・・・。」

「バカ!！ちよつと待てよ!!こんな・・・炊事洗濯で成仏するなんておかしいだろ!？」

どこを搜したらそんな願いで成仏する奴がいるんだよ。

「でも・・・ずっとね・・・このことを夢見てきたんだよ・・・だ
つて・・・このくらいしかわからないんだもん。心残りはたくさん
あるけど、夢はかなったよ、ありがとう。」

「なんで・・・おかしいよ・・・。」

そんなこと言うなよ。

これからここに居てくれよ。

「ごめんね・・・突然現れてイヤな思いさせて・・・。」

最後力を振り絞って、由美はぼくの頬に手を添える。

「ね、ねえ・・・私のこと・・・好き？」

その時ぼくの頭には、小さい頃フラれた記憶が蘇った。

「・・・・・・・・。」

答えられずにいると、頬に添えられていた手が、力なく床へと落ちていった。

「おい・・・ちょっと待てよ・・・おい由美！！起きろよ！！」

ぼくは必死に由美の体を揺すりながら、名前を呼び続けた。

「由美！！」

由美はもう動くことはなかった。

ただの人形になってしまった。

そしてぼくは由美との約束を果たすため、彼女家にむかった。

「そつか・・・由美が死んだのはおとといだから今日はお葬式なんだ・・・。」

教えて貰った住所は間違いなく由美の家で、お葬式の最中だった。

「入りづらいな、香典もないし服もラフだし・・・まあ学生つてことで非常識は勘弁してもらおう。」

でも・・・。

ずいぶん人が少ないな・・・。

「あの・・・すみません。」

ぼくの呼びかけに、部屋の奥から一人の女性がでてきた。

「由美のお友達？」

「は、はい。」

お母さんかな？

「失礼ですが・・・由美とはどちらでお知り合いに？」

「ええ！？」

説明できない！！

「あ、あの・・・とにかく、お焼香だけでもさせてもらえないでし
よいか？お話したたいこともあるし・・・。」

由美のお母さんはぼくのことを不審な目で見てくる。

それもしようがない、質問に答えられないから。しかし、由美のお
母さんは黙ってぼくを中に入れてくれた。

部屋に入り棺の写真に驚愕した。

なぜなら、写真に写っている由美はまだ子供だったから。

「由美さんは18歳じゃないんですか？あの写真じゃまるで・・・」

「ええ。元気な頃の写真はこのくらいしかなくて・・・。」

「は・・・。」

その時、ぼくはタンスの上に置いてある、ある物に気付いた。

「な・・・なんだよこれ・・・。」

おれの写真だ！？

「どういふことですかこれは！？なんでおれの写真がここに！？」

「ひょっとして・・・この写真のお子さんなの。」

するとぼくの頭にふとある記憶が思い浮かんだ。

「あ・・・あの子だ！！」

そつ、由美は幼いころぼくが初めてキスをしてプロポーズをした女

の子だった。

「由美は12年前、交通事故にあつて・・・幸い一命は取り留めたんですが・・・頭を強くうって。体をまったく動かせない状態になつてしまつたんです。容体が安定した後もその状態から戻らずに、会話はもちろん指一本動かせなくなつて・・・そのまま12年間・・・。」

12年!?

12年間も動けないまま・・・!?

「・・・辛くて・・・由美をこのままにしておくのが辛くて、これ以上の延命措置をやめることにしたんです。でもあの子は、きっと私たちを恨んでいるかもしれません・・・。」

そうか、だからあの時由美はきつと迷惑だなんて言つたのか。

「まだ由美が元気だったころ。よくあなたのことを話してくれましたよ。プロポーズされて嬉しかったけど、突然だったからびっくりして逃げてしまつたって・・・。」

「・・・嬉しかった? 由美は・・・12年前のプロポーズを真に受けたまま、動かない体の中で――」

動かない景色の中で――

ずっとおれのことを想ってたっていうのか？

由美が炊事洗濯にこだわったのはきつと……。6歳のまま時間が止まっている由美にとって、夫婦がすることといったらそのくらいしか思いつかなかったんだ。

だから……。あんなママゴトみたいな生活を夢見て……。

12年も動けなかったのなら、他にもやりたいことがいっぱいあったらうにー

それでもおれとの生活を選んでくれた……。なのにおれは……。

「今日は、由美からの伝言を伝えに来たんです。先週髪に結ってくれた黄緑色のリボンがかわいくって……。それがすごく嬉しかったって。」

それを聞いた由美のお母さんは驚きの表情を見せた。

「……。どうしてあなたがそのことを知っているの？あの時、私と由美しかいなかったのに……。」

「……。最後のお別れをしてもいいですか？」

そして、ぼくは由美に近づいていく。

由美の顔を目の前にするとぼくの目から涙が込み上げて大粒の涙となった。

「昨日、怖くて言えなかったけど。由美のこと大好きだよ。もう女の子にも臆病になったりしない。」

とめどなく流れる涙。

ぼくはそれを拭わずに最後の言葉をかける。

「最後に、炊事洗濯のほかには夫婦がすることを教えてあげるよ。」

そう言ってぼくは由美の唇に、そっと自分の唇を重ねた。

く完く

（後書き）

最後まで読んでくれた読者の皆さま、本当にありがとうございます。

これかも、もっと励みより良いものを書けたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8634d/>

メモリア

2010年12月13日02時54分発行